九州におけるナイフ形石器文化の地域性

橘　　昌信

はじめに

「地域性」この言葉はもともと，ドイツの地理学者が場所の特質を意味するものとして使用している。日本では，昭和24年「地理学の本質と原理」(田中啓爾) の中で使用されたのがはじめてであろう。

そこで，考古学研究での地域的特質について考えてみる。まず，地域性が語られるためには，他の地域と異なる特徴をもち，しかも一定の空間（分布）が必要とされる。また，人を研究対象とする考古学では，自然環境的な要素に人文的な要素が加わり，その両者が複雑に入り混じったものと考えられるから，時間的な要素も当然関係してくる。さらに，特質の数量な面も問題とされよう。

弥生時代における九州地方は，水稲耕作を基盤とする高い生産力と大陸文化の門戸としての「北部九州」，瀬戸内海を媒介に東の地域との接触が強く見られる「東部九州」，シラス台地での畑作に生産力を求める「南部九州」の三つの地域に，あるいは北部九州と南部九州との両者の要素が認められる「中部九州」を加えた四つの地域に，弥生時代の地域性を見い出すことができる。(1)

いっぽう，縄文時代については，約8000年という長い期間にわたって継続しているので，いちがいに地域性を設定することは困難であるが，「西北部」と「東南部」あるいは「北部」と「南部」という形で，とらえることができるであろう。(2) これに時間的な面を加えると，より明確な地域性を抽出することができる。たとえば，縄文中期から後期にかけて，伊万里市腰岳産の黒曜石製の縦長剥片剥離技術を基盤にして，石鋸・サイドブレイド，結合式釣針，石銛，鯨類の骨のスタンプなどに特徴づけられる「西北九州」。(3) 同じく縄文中期から後期にかけて，全縄文や磨消縄文の土器に瀬戸内地方との関連が顕著に見られる「東九州」。(4) さらに，縄文早期から後期の長い期間，独得の縄文式土器が発達している「南九州」。(5) というように，それぞれ三つの地域には他とは異なる特質が見いだせ，しかも一定の分布域が見られる。

では，九州地方において，縄文時代よりさらに古い時代において，弥生・縄文時代に設定できるような地域性がはたして存在するのであろうか。また，もし存在するとすればどのようなかたちで，何にそれがもっとも反映されているのか，興味ある一つの問題である。

九州地方に入る前に，先学による日本列島という地域における旧石器（先土器）時代の地域性について概観し，日本列島での九州の地域性を先に見ておくことにしよう。

(1)

日本の後期旧石器時代の大半はナイフ形石器文化で占められている。この文化はかなり明確な地域性(地方性)の有ることが知られている。すなわち，東北地方から中部地方の北半にかけての地域では，石刃を素材にして，その先端や基部に僅かな刃潰し加工を施したナイフ形石器(杉久保型・東山型など)に特徴が見られる。これに対して，中部地方南半および関東地方から九州地方にかけての広い地域には，縦に長い剥片の二側縁に刃潰し加工を行なったナイフ形石器(茂呂型・九州型)が盛行している。さらに，畿内の一部から瀬戸内地方を中心に，瀬戸内技法による翼状剥片を素材に用

いたサヌカイト製のナイフ形石器(国府型・宮田山型)が集中的に存在している。これらは日本列島のナイフ形石器文化におけるナイフ形石器の素材・製作技術による地域性は具体的な一例である。[6]

いっぽう，後期旧石器時代終末の細石器文化については，北海道から東北地方，さらに中部地方の北部にかけての「東北日本」と九州・中四国・近畿・東海・関東南部・中部地方南部までの「西南日本」という二つの地域性が見られる。この二大別は，細石器文化の細石核(細石刃用石核)の製作技術(製作過程)およびその形態の特徴から行なわれるものである。すなわち，湧別技法を基盤とする舟底形細石核と，剥片・礫を素材にした円(角)錐形・円(角)柱形細石核の形態の違い，さらに，細石核としての素材(ブランク)の準備の相違によるものである。[7]

以上のような，ナイフ形石器文化および細石文化での地域性の把握は，きわめて概略的なものであるが，日本列島の後期旧石器文化の実態を究明する上での重要な手がかりを与えていることは確かである。両文化の地域性の一線が共に中部地方の南部と北部とに認められることは興味ある事実である。また，九州地方のナイフ形石器文化が，瀬戸内・近畿という地理的に近接する地域をとびこえた遠隔の地域とより密接な特質が見られることも注目されよう。

地域性の研究は，考古学・歴史学での時間的な流れおよび位置づけ(編年)と共に，最も基礎的でかつ重要な研究と考えられる。これまでの旧石器文化の研究は，時間的な変遷すなわち編年的研究により大きなウエイトが置かれていた感がある。これは考古学研究での基礎になるため，重要かつ必要なことであるが，この編年的研究の精度を高めるためには，巨視的な見方のほかに，どうしても地方・地域ごとの微視的な立場が必要であり，地域性の研究が加味されなければならない。

地域性が形成される背景には，先に述べたようにいろんな要素が複雑にからみあっているであろうが，いずれにせよ，そこには直接的あるいは間接的に人びとの生活が反映され，また人びとの動きが大きく働いていることに外ならない。それゆえ，地域性は固定化されたものでなく，きわめて流動的な姿として存在するものである。そのため，地域性を論じるには，一つの遺跡，あるいはあるまとまりを有する遺跡群の多くの属性・様相などをあらゆる視点から的確に把握される必要がある。また，それらが時間的に正しく位置づけられていることも当然要求される。

日本列島におけるナイフ形石器文化・細石器文化に認められる大まかな地域性のあり方も，それぞれの文化での時間的な変遷や，より限定された空間でとりあげることによって，旧石器時代人のより正確な営みや動きを具体的な形で抽出することが可能になってくるものと予想される。

そこで，日本列島に見られた後期旧石器文化の地域性を，九州地方というより狭い地域で，さらにナイフ形石器文化での編年を考慮して，九州におけるナイフ形石器文化の地域性について，若干の考察を試みることにする。

(2)

九州において，ナイフ形石器を主体とする石器群は，およそ3万年前に近いころから約15,000年前までの間継続したものと考えられている。このナイフ形石器に代表されるナイフ形石器文化は約15,000年間の期間があるが，この間の時間的な変遷すなわち編年の大網は，石器群の地層(層位)的な出土を手がかりに組みたてることができる。層位的な手がかりになる土層(鍵層)として，姶良丹沢火山灰(通称ＡＴ)がある。このＡＴは鹿児島県の姶良カルデラ起源の火山堆積物で，九州の大部分から東北地方の一部の地域まで認められる広域火山灰である。しかも，その堆積年代は約21,000年前～22,000年前と考えられており，時間的にナイフ形石器文化のほぼ中間の時期に相当するので鍵層としてもっともふさわしい。[8] すなわち，ナイフ形石器文化の石器群をＡＴの降下堆積以前と以後という大別ができ，さらに広範囲にわたって堆積しているので，地域間相互の比較も可能である。

ATについで鍵層になるものとして，AT直下に黒色帯あるいは暗色帯と呼ばれる特徴的な土層が，東九州から中九州，それに西北九州の一部に認められる。この土層の生成のメカニズムについては不明だが，植物の繁茂と腐蝕，火山灰の地表面への供給，それに気候（温度）などが複雑に作用しているのであろう。

また，東九州や中九州の地域においては，AT直上のATが風化土壌化した土層，あるいは，その上層のいわゆるハードローム層やソフトローム層なども，石器群の層位的な出土例として，援用することができよう。

以上のような火山灰の層位的な結果を含えた九州の旧石器時代の編年については，橘・萩原[9]などによるものがあり，それらを時間的変遷の基礎において，九州におけるナイフ形石器文化の地域性をさぐってみたい。

（3）

現在，九州においてナイフ形石器を主体とする石器群が出土している遺跡は約450か所を数えることができる。その大半は分布調査などでの表面採集による確認であり，出土層位や石器群のまとまりなどは不明である。そこで，出土層位が明確な石器群を，ATとの関係で，すなわち，ATより下位の層から発見されているものと上位の層から発見されているものに大別する。

3－1．AT下位の土層から石器群が発見されている主要な遺跡として，大分県の岩戸遺跡第2・3文化層，岩戸E～G文化層，駒方遺跡C地点[12]・駒方古屋遺跡[13]，百枝遺跡C地区[14]，熊本県の下城遺跡第2文化層[15]，曲野遺跡VI層[16]，石飛遺跡6層[17]，鹿児島県の上場遺跡6層[18]，長崎県の百花台遺跡VII層[19]などをあげることができる。これらの遺跡・文化層出土の石器群がすべて同じ時期の所産として考えられるものでなく，また石器群の内容も必ずしも一致していないが，ATより下位の石器群としては一括してあつかうことができ，便宜上，ナイフ形石器文化の第I期としておく。

この第I期のナイフ形石器は，縦長剥片を素材にして，その一端を斜めに截断するように整形した部分加工のナイフ形石器，縦長剥片の二側縁に調整を施したナイフ形石器がある。これらは長さが5cm前後のものと3cm以下の小形のものが存在する。同じく縦長剥片を素材にして，その一側縁に沿って調整加工が施されたものもある。このほかに，定型化していない剥片を素材にした切出状の小形のナイフ形石器が出土している。豊富な形態上のバリエイションとその製作技術の中に，AT上位の時期に盛行するナイフ形石器の完成された一つの姿を，AT下位のナイフ形石器に見ることができる。

これらのナイフ形石器のうち，小形の切出状のナイフ形石器は，曲野VI層と上場6層で出土しており，その外の遺跡では知られていない。これとは逆に，この両遺跡では他の遺跡で出土している縦長剥片を素材にしたナイフ形石器を欠いている。この点については，曲野遺跡での出土層位はAT下位の黒色帯よりもさらに下層に，文化層が求められることから，縦長剥片素材のナイフ形石器よりも時期的に古い位置づけが予想される。また，上場遺跡の場合はAT下位に黒色帯の堆積がなく，AT下層の土層から出土しているので，曲野遺跡と同じケースも考えられる。AT下位に見られるナイフ形石器の素材および形態の相違は，恐らく時間的な差によるものと考えられよう。

AT下位の石器群には，ナイフ形石器のほかに，台形(様)石器がある。このことは上場遺跡6層上部の石器群ですでに知られていたことであるが，曲野遺跡において好資料がまとまった数発見されたことによって，より確かなものとなった。この時期の台形石器は，AT上位で出土するものに比べて，素材になった剥片に統一性が少なく，しかも側辺の調整加工は全般的に大きくあらいとい

う傾向が見られる。また，側辺の調整は急斜度のもののほか，一部は面的におよんでいる。上場遺跡出土の資料から，縦に長い剥片を分割して調整加工する「折断技法」[20]の存在が提唱されている。この技法に関連するものと考えられる資料が，曲野遺跡や駒方古屋遺跡においても見ることができる。台形石器はＡＴ以後のナイフ形石器文化において，西北九州の地域を中心に顕著な発達が認められる石器であるだけに，それらの台形石器との関連が問題視されると共に，ＡＴ以前における出現の背景も大きな課題である。

ＡＴ下位の石器群では，ナイフ形石器・台形石器のほかに特徴的な石器はきわめて乏しい。断片的に知られているものでは小形の槍先形尖頭器・彫器・削器・掻器などがある。しかし，これらの石器は先にあげたすべての遺跡で発見されるのではなく，しかも，その数は数点という状況である。結局，現在の時点では，ＡＴ下位の石器群は定型的な石器が極端に少ないといえよう。

次にＡＴ下位の石器群の剥片剥離技術には，単設および両設打面を有する縦長剥片の石核が認められる。ほかに，求心状剥離のある円盤形石核，打面転移がひんぱんに行なわれている石核，それに剥離作業面と打面とが交互に入れかわるチョピングトウール状のものなどが出土している。これらの石核から，この第Ｉ期での剥片剥離技術の一端をうかがうことができる。それによると基本的にはナイフ形石器文化を通し普遍的なあり方を示しているといえるであろうが，特に，縦長剥片剥離技術が発達していることに特徴が見られる。また，縦長剥片とそれを素材にしたナイフ形石器との密接な結びつきが特色とされよう。

ＡＴ下位の石器群はＡＴ上位のそれに比較して，石器の種類・数量が共に乏しく，大きな開きが認められる。端的にいえば，遺跡の規模が小さいということであろう。このことは，一遺跡を構成する構成員の数の少なさや，生活が営まれた時間の短さ，などに関連するのであろうか。

以上，ＡＴ下位出土の石器群の様相を見てきたが，この第Ｉ期では，地域による特質については特に看取できなく，むしろ地域を越えた時期による共通性の方がより顕著にあらわれている。もっとも，第Ｉ期の遺跡は今のところ十数例という数なので，今後の資料の増加によっては地域性が認められるようになるかも知れない。

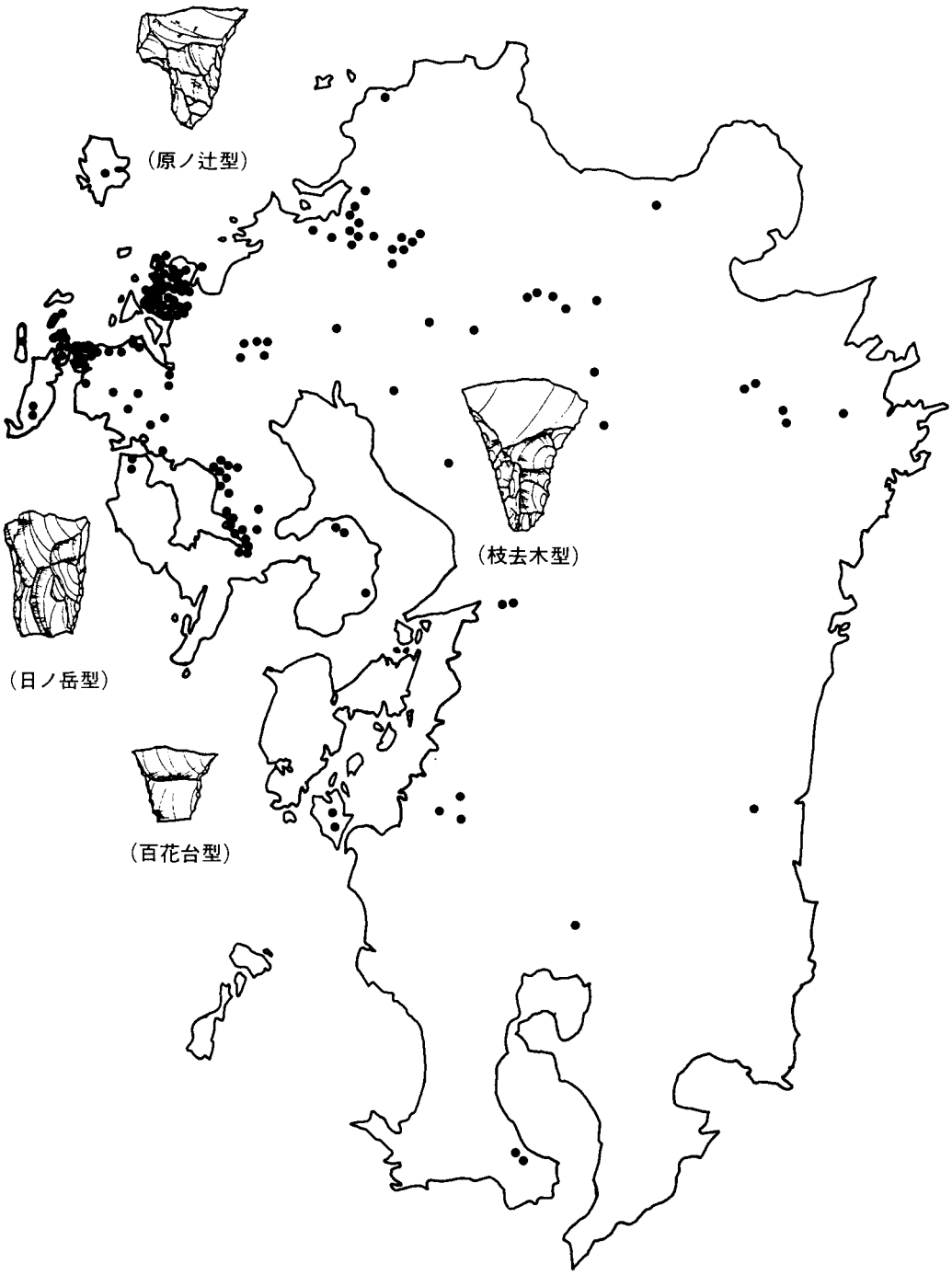
３－２．ＡＴの風化土壌からいわゆるハードローム下部にかけての石器群は，ナイフ形石器文化の第II期としてとらえることにしたい。

ＡＴとの関連で，層位的に石器群の様相がほぼ把握できると考えられる代表的な遺跡として，岩戸Ｉ文化・岩戸Ｄ文化・岩戸遺跡６層下部，百枝第２文化，宮崎県の堂地西遺跡[21]，上場遺跡４層，石飛遺跡４層，鹿児島県の小牧IIIＡ遺跡[22]，百花台遺跡５・６層などをあげることができる。瀬戸内系の好資料が発見された佐賀県の船塚遺跡[23]，長崎県の日ノ岳遺跡[24]もこの第II期に含めることができよう。

第II期のナイフ形石器は一側縁加工・二側縁加工・部分加工・基部加工など，ナイフ形石器文化に認められる基本的なナイフ形石器はすべて揃っている。ほかに，瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器も見られる。このようなナイフ形石器の隆盛と共に，第Ｉ期ではきわめて断片的な存在であった台形石器や槍先形尖頭器などの発達が，この時期の特徴とされる。

台形石器の多くは縦に長い剥片が素材に用いられており，その形態・加工に斉一性がうかがえる。「日ノ岳型・技去木型・原の辻型」諸型式の台形石器の存在が顕著である。いっぽう，槍先形尖頭器も，「剥片尖頭器・三稜尖頭器・角錐状石器」などと呼ばれる特徴的な形態と加工を有するものが，ナイフ形石器に共伴している。このほかに，掻器・削器・彫器・石錐など，石器の種類が豊富になり，ナイフ形石器文化の石器組成を構成している。

剥片剥離技術では，縦長剥片・横長剥片それに不定形な剥片などが存在し，これらの剥片を剥離



第1図　台形(様)石器の出土遺跡分布図

した石核は第Ⅰ期と同様に，縦長剥片石核・円盤状石核・多面体石核・チョピング状石核である。縦長剥片石核以外の石核の出土が著しい。さらに，この時期には瀬戸内技法に関連する剥離技術が認められる。このことは第Ⅰ期ともっとも異なる点である。

一遺跡・一文化層での石器群の数量は，前の時期と比較にならないほど多量に認められる。また，層位的な明確さを欠くが，第Ⅱ期と考えられる遺跡数は急激な増加がみられる。

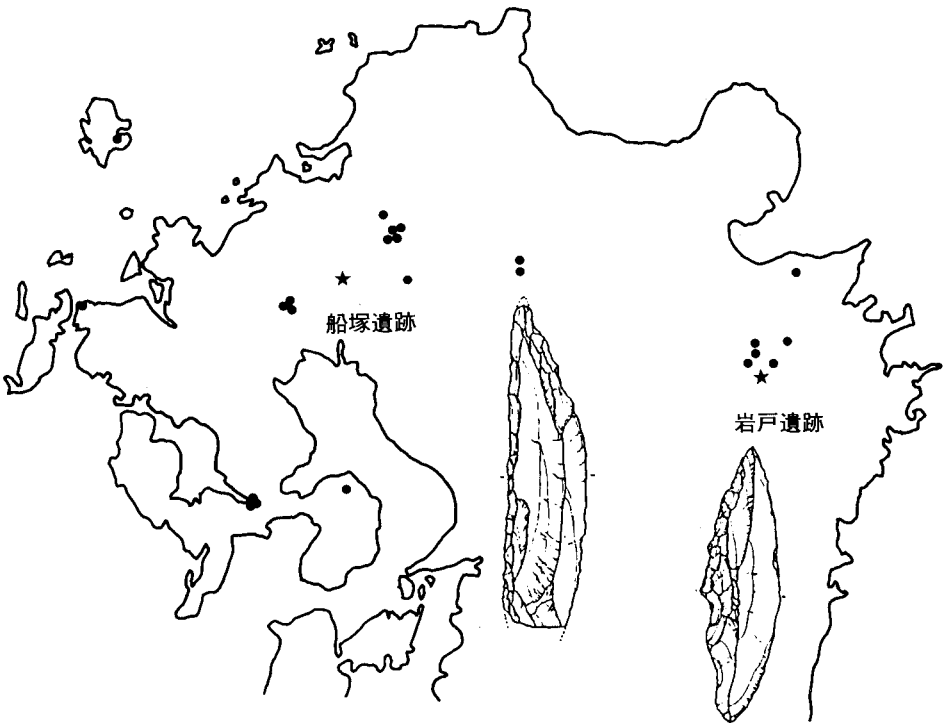
以上が，ナイフ形石器文化第Ⅱ期石器群の全体的な様相であるが，これらの石器群のあり方は，九州全域の各遺跡や文化層において，同じような様相を示していない。それがもっとも具体的にあらわれているのは台形石器であり，またナイフ形石器の一部にも見ることができる。

台形石器が出土している遺跡は，現在のところ約180か所が知られている。この数はナイフ形石器文化の第Ⅱ期と第Ⅲ期の両者の数であるが，その約８割は長崎と佐賀の両県，それに福岡県の西側，すなわち，西北九州の地域で占められている。特に，唐津市の周辺と松浦市の周辺に集中している。残り２割は東九州と中・南九州の地域で，ほぼ等分している状況である。遺跡数でこそ東九州と中・南九州で約２割を占めているが，この両地域における一遺跡での台形石器の数は，大半の遺跡ではごく少量の出土である。実質的にはより西北九州に大きくかたよっているといえよう。（第１図）

いっぽう，ナイフ形石器では，西北九州の地域では二側縁加工および部分加工のナイフ形石器が顕著である。これに対して，東九州の地域では，縦長あるいは横長剥片を素材に用いた一側縁加工・基部加工のナイフ形石器がめだつという傾向が認められる。

各種の槍先形尖頭器は，九州の各地域において出土しているが，その中にあって，東九州地域では三稜尖頭器や剥片尖頭器などが，他地域より発達しているとみなすことができる。

瀬戸内技法に関連するあるいは類似する横長の剥片や「国府・宮田山系」のナイフ形石器が出土



第２図　瀬戸内技法関連資料の出土遺跡分布図

している遺跡は約30か所を数えることができる。その大半は表面採集によるもので，しかも船塚遺跡や岩戸遺跡以外では，資料数がきわめて限られている。その分布は九州の北半部に認められ，南九州の地域で明確なものは知られていない。（第２図）

ナイフ形石器の第II期は，尖頭器や台形石器の著しい発達や瀬戸内地方の影響が見られるなどの新しい要素が加わっている。それと共に，石器群の様相は西北九州と東九州で相違が認められる。中九州や南九州の地域は，両地域の中間的な様相を呈している。これらの状況は第Ｉ期においては見られなかったことであり，第II期にいたってナイフ形石器文化での地域性が，九州において抽出できるということである。

３－３．いわゆる「ハードローム層」から「ソフトローム層下部」，ないしはそれに相当する土層に主たる文化層が考えられる石器群を，ナイフ形石器文化の第III期とする。

それらの代表的な石器群として，岩戸Ｂ文化・岩戸遺跡６層上部，大分県の製糸工場前遺跡[25]，百花台III文化[26]・百花台遺跡４層，下城第１文化などで，層位的にとらえられている。このほか，火山灰との関連は堆積層が薄くて不明瞭であるが，長崎県の中山遺跡[27]，柿崎遺跡[28]，佐賀県の平沢良遺跡[29]，磯道遺跡[30]なども，この第III期の時期に入るものと考えられる。

この時期の石器群の全体的な様相は，第II期とほぼ同様とみなされる。ナイフ形石器は前の時期に存在した各種のものが引き続いて存在するが，縦長剥片を素材にして，それを截断するように二側縁加工を施したナイフ形石器と基部加工のナイフ形石器が特に発達している。台形石器は第II期に顕著であった日ノ岳型・枝去木型などに対して，より整った小形の「百花台型」の台形石器が盛行する。尖頭器類についても各種のものが存在するが，第II期ほど顕著でなさそうである。剥片剥離技術も前の時期と基本的には同じであるが，二側縁加工・基部加工のナイフ形石器が著しいことに呼応して，特に縦長剥片剥離技術の発達に特徴がみいだせる。

このように，第III期のナイフ形石器文化における石器群の全体的な様子は，第II期をそのまま受けついだ形での発展が見られ，地域性についても，大局的には第II期と同様な傾向がうかがえる。

台形石器は百花台型を中心に，やはり西北九州の地域に集中している。東九州，中・南九州においては第II期とほぼ同様なあり方を示している。ナイフ形石器の各種のタイプのうち，縦長剥片素材の二側縁加工のものは，台形石器と同様に西北九州地域に濃密な分布がうかがえる。これに対して，東九州の地域では縦長剥片を素材にした基部加工のナイフ形石器と，一側縁加工のナイフ形石器とに特徴が見られる。台形石器とナイフ形石器のあり方に，西北九州と東九州の両地域のちがいが認められることは，第II期と同様である。

ところで，槍先形尖頭器は東九州の第II期での特徴的な石器であったが，この第III期においてはほとんど出土例がなくなってしまう。いっぽうの西北九州地域では，第II期と同様に剥片尖頭器・三稜尖頭器それに周辺加工の尖頭器などが引き続きナイフ形石器に共伴している。

中九州や南九州の地域は，やはり西北九州と東九州の中間的な様相がうかがえる。

第II期に九州の北半部に点在していた瀬戸内技法に関連する資料は，この第III期においては確実な資料が認められず，ほぼ姿を消してしまうと考えられる。

（４）

以上，九州におけるナイフ形石器文化について，火山灰の堆積を基礎に，第Ｉ期から第III期までの時間的な変遷を設定し，さらに石器群の様相から各期における地域性についてを試みた。

その結果，ＡＴより下位の石器群は資料数がまだ少ないせいか，地域性を特に抽出することはできず，むしろ，地域を超えた共通性がうかがえたのである。

いっぽうＡＴより上位の第II期・第III期の石器群では，台形石器・ナイフ形石器それに尖頭器などに，地域性と呼べる様相が考えられた。第II・第III期という時期の設定については，今後さらに究明していかなければならないであろうが，両時期に予想される石器群の様相の違いを，仮に「西北九州型石器群」と「東九州型石器群」として，両地域の地域性の一つのあり方としてとらえることができよう。

また，西北九州で著しい発達が見られる台形石器や縦長剥片を截断するような二側縁加工のナイフ形石器が，東九州や中・南九州において出土することは，「西北九州型石器群」の東あるいは南への拡散・波及の現象とみることができよう。また，瀬戸内技法に関連すると考えられる石器群が，九州のナイフ形石器文化のある時期，すなわち，第II期に限って九州の北半部の地域に出現した感がある。これらの状況は，ナイフ形石器文化のあり方が固定化されたものでなく，たぶんに流動的であることを具体的に示唆するものと考えられる。

今後，ナイフ形石器文化での第II期・第III期という時間的な設定をより確実に，しかもさらに短い期間での画期を求めると共に，その限定された時期での石器群の様相を明らかにする必要がある。また，現在予想される「西北九州型」と「東九州型」の石器群の地域性がどのような要因や背景のもとにあるのか，さらに地域間相互の関連などについての究明が待たれる。これらのことが解決されることによって，本当の意味での「地域性」の存在が明確になる。

〔注〕

(1) 森貞次郎「弥生文化の発展と地域性―九州―」『日本の考古学』III弥生時代，河出書房，1966年，32～80Ｐ．

(2) 賀川光夫・乙益重隆「縄文文化の発展と地域性―九州西北部・九州東南部」『日本の考古学』II縄文時代，河出書房，1965年，250～284Ｐ．

(3) 橘昌信「西北九州における縄文時代の石器研究１―縦長剥片―」『史学論叢』第９号　別府大学史学研究会，1978年，75～93Ｐ．

(4) 前川威洋「九州における縄文中期の現状」『古代文化』第21巻第３・４号，古代学協会，1969年，55～62Ｐ．

(5) 河口貞徳「鹿児島県における貝殻条痕文土器について」『鹿児島県考古学会紀要』第４号，鹿児島県考古学会，1955年，３～６Ｐ．

(6) 小野昭「ナイフ形石器の地域性とその評価」『考古学研究』16巻２号，考古学研究会，1969年．21～45Ｐ．
鎌木義昌「刃器文化」『日本の考古学』Ｉ先土器時代，河出書房，1965年，131～144Ｐ．

(7) 橘昌信「日本細石器文化の地域性」『駿台史学』第60号，駿台史学会，1984年，57～70Ｐ．

(8) 町田洋・新井房夫「広域に分布する火山灰―姶良Ｔｎ火山灰の発見とその意義」『科学』46，1976年，339～347Ｐ．

(9) 橘昌信・萩原博文「九州における火山灰層序と旧石器時代石器群」『第四紀研究』22巻３号，第四紀研究会，1983年，165～176Ｐ．
橘昌信「九州における先土器時代石器群の編年と地域性」『論集日本原史』吉川弘文館，1985年，139～160Ｐ．

(10) 芹沢長介編「岩戸」『東北大学文学部考古学研究室考古学資料集』第２冊　東北大学文学部考古学研究室，1978年．

(11) 坂田邦洋・他「大分県岩戸遺跡」広雅堂，1980年．

(12) 吉留秀敏「駒方Ｃ遺跡の認査」『大野原の先史遺跡』大分県文化財調査報告第65輯，大分県教育委員会，1984年．

(13) 橘昌信「駒方古屋遺跡発掘調査報告書」別府大学付属博物館，1985年．

(14) 栗田勝弘・他「百技遺跡Ｃ地区大分県三重町百枝遺跡発掘調査報告書」三重町教育委員会，1985年．

(15) 熊本県教育委員会「下城遺跡」II『熊本県文化財調査報告』第50集，熊本県文化財保護協会・熊本県教育委員会，1980年．

(16) 熊本県教育委員会「曲野遺跡」Ｉ『熊本県文化財調査報告』第61集，熊本県教育委員会　1983年．

(17) 池水寛治「熊本県水俣市石飛分校遺跡」『考古学ジャーナル』第21号，ニューサイエンス社，1968年，18～21Ｐ．

(18) 池水寛治「鹿児島県出水市上場遺跡」『考古学集刊』3巻4号，東京考古学会，1967年，1～21ｐ．
(19) 百花台遺跡発掘調査団「百花台1983」国見町教育委員会・長崎県立国見高校・同志社大学考古学研究室，1983年．
(20) 池水寛治「上場技法とその展開」『もぐら』第8号，鹿児島県立出水高等学校考古学部，1969年，2～5ｐ．
(21) 永友良典「宮崎市学園都市堂地西遺跡の発掘調査」『考古学ジャーナル』242号，ニューサイエンス社，1985年，29～32ｐ．
(22) 長野真一「南九州地域の火山灰層」『考古学ジャーナル』242号，ニューサイエンス社，1985年，18～22ｐ．
(23) 八尋実「船塚遺跡」『神埼町文化財調査報告書』第10集，神埼町教育委員会，1984年．
(24) 下川達爾「長崎県日ノ岳遺跡の石器文化」『物質文化』25，物質文化研究会，1975年，21～36ｐ．
(25) 橘昌信「製糸工場前遺跡」『別府大学博物館研究報告』3，別府大学博物館学課程，1979年，13～20ｐ．
(26) 麻生優・白石浩之「百花台遺跡」『日本の旧石器文化』第3巻，遺跡と遺物（下）雄山閣出版，1976年，191～213ｐ．
(27) 萩原博文「中山遺跡」『日本の旧石器文化』第3巻，遺跡と遺物（下）雄山閣出版，1976年，214～229ｐ．
(28) 長崎県教育委員会「柿崎遺跡」『九州横断自動車道建設に伴なう埋蔵文化財緊急発掘調査報告』1，長崎県教育委員会，1981年．
(29) 杉原荘介・戸沢充則「佐賀県伊万里市平沢良の石器文化」『駿台史学』巻12号，駿台史学会，1962年，10～35ｐ．
(30) 肥前町教育委員会「田尾遺跡群磯道遺跡」『肥前町文化財調査報告書』第1集，1981年．